

## 第4章 悲嘆の果てに

前章に見たように、ムーサたちの歌声は人々や神々を魅了して喜ばせるが、白鳥の歌に代表されるように鳥が関わる悲しい歌声の物語もあり、悲しみが人をも鳥に変えた物語もある。

### 1 ピークスとカネンス

ピーエリデスが変身したとオウイディウスに語られるカササギはラテン語ではピーカという。ピーカ(Pica)は女性名詞であるが、これに対応する男性名詞のピークス(Picus)はキツツキを意味する。ウエルギリウスは、キツツキが遠い昔のイタリア王ピークスの化身であったことを、次のように語っている。

館は荘厳にして壮大、百の柱の上に棟高く、都を見下ろす高みにあった。ラウレンテース人の王ピークスの宮殿にして、まわりの森と父祖への畏敬が人を厳肅な気持ちにさせた。ここで王笏を受

け取り、儀斧を最初に捧げ持つことが代々の王には吉兆となった。彼らには、この神殿が衆議の場であり、ここが神聖な宴の場所でもあった。ここで羊を屠り、元老たちが切れ目なく連ねた食卓の席につくのをつねとした。「中略」さて、ピークス王自身は、クイリーヌスの杖を携え、トラベアを短くたくし上げて座り、左手には神盾を持っていた。巧みな馬の馴らし手であった王は、欲望の虜となった妻によって黄金の杖で打たれ、魔法の薬で姿を変えられた。キルケーが鳥に変え、翼にさまざまな色を振り撒いたのだった。〔アエネーイス〕七・一七〇—一七六、一八七—一九二〕

テイベリス川（現在のテヴェレ川）を西端として、山嶺と海岸線にはさまれながら東へ一五〇キロメートルほど広がる地域を、ラティウム（現在のラチオ）と呼んだ。ラウレンテース人はテイベリスの河口付近に住んでラティウムの盟主を自任していた。ピークスはその王であったが、魔女キルケーによって姿を変えられたのである。キルケーは『オデュッセイア』ではアイアイエーという島に住んでいたが、ローマの伝承ではラティウムに住んでいた。その町はキルケーイイー（Circei）といい、現在のチルチエーオ岬（Monte Circeo）にその名を残している。ピークスの変身の次第について、ウエルギリウスはごく簡単にしか触れず、キルケーが彼の妻であったと述べているが、オウイデイウスによれば、実は、キルケーに見そめられたとき、ピークスにはすでにカネンスという愛する妻がいて、それが悲劇の原因であったという。カネンスは「歌っている（人）」という意味で、その悲しみの歌声は必ずや聞く者をも涙で満たしたに相違なく、実際、その名が忘れられることはなかった。オウイデイウスが語る物語（『変身物語』一四・三二—四三四）は、オデュッセウス一行がキルケーの館に逗留したときに遡り、館の中にピークスの像があったことに端を発する。

それは雪のように白い大理石で作られた青年像で、頭にキツツキをのせた姿で聖堂に祀られ、たくさんの花輪が供えられていた。これを見てオデュッセウスの配下の一人マカレウスという男が、キルケーの侍女にどのような縁起があるのかと尋ねた。侍女はそれがピークスであることを話し、彼は軍馬が好きで、心ばえもすぐれていたが、なによりも石像から窺えるように際立った容姿の美男子であった。そのため、ラティウム中の山のニンフ、泉のニンフ、川のニンフらがこぞって彼に懸想したが、ピークスはそのすべてをしりぞけ、カネンスと呼ばれるニンフただ一人を愛したという。

彼女は結婚に適する年齢に成長するや、誰よりもラウレンテース人ピークスを愛で、彼に身を委ねました。容姿も類いまれながら、歌の技術はさらに類いまれで、このためにカネンスと呼ばれました。森や岩を動かす、野獸を手なづけ、長く延びた川を堰き止め、鳥の渡りを引き止めることも、彼女の歌声なら朝飯前でした。

〔変身物語〕一四・三三五―三四〇

まるでオルペウスを思わせるような歌の力だが、あるとき、彼女がそのような歌を歌っている一方で、ピークス王が狩りに出かけると、そこへたまたまキルケーが来合わせた。彼を見るなり、キルケーは恋の炎に身を焦がされた。自分の魔術に効力のあるかぎり、逃げられはしない、と彼女は言うや、猪の似姿をこしらえ、王の目の前を横切らせ、森の茂みの中へと走り込ませた。馬が入れぬような場所であったため、ピークスは徒歩であとを追って深い森へ踏み込んだ。キルケーは呪文を唱え、雲と霧であたりを暗くして王の従者たちをたぶらかすと、王に嘆願した。自分を受け入れてくれるようにと繰り返し願うキルケーに対し、ピークスは、カネンスに命のあるかぎり夫婦の契りを破ることは決してない、と言って断った。すると、キルケーは言った。

「報いを受けずにすむと思うな。カネンスのもとへも戻れぬぞ。傷つけられた女、それも恋する女が何をするものか知るがいい。目にも見せるぞ、恋し、傷ついた、女の身のキルケーがな」。

それから日の沈む方角へ二度、日の昇る方角へ二度向きを変え、三度若者に杖で触れ、三度呪文を唱えました。若者は逃げましたが、自分が普段より速く走っているのを不思議に思います。と、翼が体に生えているのが見えました。突如として自分がラティウムの森に加わる新参しんさんの鳥となったことに彼は憤慨し、硬い嘴を檜の木の荒い木肌に打ち込みました。怒りにまかせて長い木の枝に傷を与えます。翼はマントの緋色で彩られ、マントを止めていた留め具の黄金が羽毛を飾り、頸のまわりにも金色が輝きました。昔のままに変わらないのはピークス「キツツキ」という名前だけです。

(同一四・三八三—三九六)

他方、王の従者たちも、キルケーに抵抗しようとしたため、彼女の魔法によって獣の姿に変えられてしまった。カネンスは悲嘆にくれながら夫をさがして野をさまよった。

六日六夜を過ごすあいだ、眠りも食べ物もとらぬまま稜線を渡り、峡谷を越えて風まかせに進みましたが、結局、悲嘆と道程に疲れ果ててテイベリス川にいたり、冷たい川岸の上に体を横たえます。そこで涙とともに悲痛な思いを調べにのせ、か細い声で哀悼の言葉を紡ぎ出しました。それはさながら、瀕死の白鳥が弔いの歌を歌うときのようなのです。ついには嘆きのために体が溶けて骨の髄まで希薄となり、形を失うと、少しずつ淡い空気の中へ消え去りました。それでも、伝承はこの場所ところに刻まれました。この場所をニンフの名にちなんで「カネンス」と、いにしえの住人が名づけたからです。

(同一四・四二二—四三四)

## 2 メレアグリデス（メレアグロスの姉妹たち）

カネンスの嘆きの歌は夫ピークスの鳥への変身に起因していたが、身内の死を嘆くうちに鳥に変身した娘たちの物語もある。メレアグリデスと呼ばれた姉妹の話は、アントーニーヌス・リーベラーリスによれば、次のとおりである。

アレース神の息子ポルテウスの子オイネウスは、カリュドーンの王であった。彼は、テストイオスの娘アルタイアを妻とし、メレアグロス、ペーレウス、アゲレオース、トクセウス、ペリパースという息子たちと、ゴルゲー、エウリュメデー、デーイアネイラ、メラニツペーという娘たちをもうけた。

あるとき、彼は、国のために初物奉納を行っていたところ、アルテミス女神のことを忘れてしまった。女神は怒って野猪を送りつけた。猪は土地を荒らし、多くの人々を倒した。そこで、メレアグロス、およびテストイオスの息子らが猪に立ち向かうべくギリシア中から強者どもを呼び集めると、駆けつけた勇士らが猪を殺した。そして、メレアグロスは、猪の肉は勇士たちに分配し、頭と毛皮を自分の得るべき誉れとした。ところが、アルテミスは、神聖な猪が彼らに殺されると、なおいっそう激しく怒り、彼らのあいだに不和を吹き込んだ。というのは、テストイオスの子らと他のクレーテス人が毛皮に手をかけ、誉れの半分は自分たちのものだ、と言ったからである。メレアグロスは力づくで奪い取り、テストイオスの子らを殺した。これをきっかけにクレーテス人とカリュドーンの人々のあいだに戦争が起きたが、メレアグロスは戦争に出陣しなかった。彼に対し

て、母親が自分の兄弟を殺されたために呪いをかけたことを非難していたからである。

やがてクーレーテス人が都をまさに奪取しようとしたとき、メレアグロスを妻のクレオパトラがカリュドーンの人々を護るよう説得した。すると、メレアグロスはクーレーテスの軍勢に立ち向かい、自身も命を落とした。母親が運命の女神モイライより与えられた薪を燃やしたためである。

オイネウスの他の子らも戦場で命を落としたが、カリュドーンの人々のあいだでは、メレアグロスを悼む嘆きがもっとも大きかった。彼の姉妹たちは墓に向かつてひたすら泣き続けたので、ついにアルテミスが彼女らに杖で触れて鳥に変身させたうえ、レロス島に住まわせてメレアグリデスと名づけた。彼女らは、いまにいたるまでなお、気候のよい季節にメレアグロスのことを嘆いていると言われる。アルタイアの娘らのうち、ゴルゲーとデーイアネイラの二人は、ディオニューソスの温情によって変身しなかったと伝えられる。アルテミスがディオニューソスの頼みを聞き入れたのだという。

〔変身物語集〕一

物語の主筋はいわゆる「カリュドーンの猪狩り」と呼ばれるもので、主人公はメレアグロスである。メレアグリデスは名前のとおり、言ってみれば、その付け足しにすぎない。そもそも、ギリシア語のメレアグロスは普通名詞としてホロホロドリという意味なので、変身譚は鳥の名前の縁起として作り出されたのかもしれない。そうしたおまけの話ではあるが、オウイディウスはメレアグリデスの嘆きを尋常ならぬものとして大仰に描いている。

神が私に弁舌鳴り響く百の口、また、溢れる才能とヘリコン全山を授けてくださったとして、も、哀れな姉妹らが悲しみにくれる言葉を綴りつくせはしないであろう。彼女らは、人前をはばか

らずに胸を叩いて青あざをつけ、まだ遺体の残るうちは、遺体を何度も何度もかき抱き、口づけを遺体だけでなく、棺にまで与える。灰となったあととは、灰をすくって胸に押しつけ、塚に身を投げかけて横たわり、墓石に刻まれた名前を抱きながら、名前の上に涙を注ぐ。ようやくレートーの娘なる女神「アルテミス」もパルターオーンの息子オイネウスの一家の破滅により溜飲を下げると、ゴルゲー、それに、貴いアルクメーネーの嫁となるデーイアネイラを除いた娘らの体に羽を生やして浮き上がらせる。両腕から翼を長く伸ばし、口を硬い角質にしてから、姿を変えた彼女らを空へ送り出した。

〔変身物語〕八・五三三―五四六

さて、カリュドーンの猪狩りとメレアグロスの物語は『イーリアス』にも見られるが、ここではメレアグロスが死んだ次第は語られていない。たしかに、母親アルタイアは兄弟を殺されたのを恨んで彼を呪い、その死を願って冥界の神々に祈った（同九・五六六―五七二）——そして、そのためにメレアグロスが出陣を拒んだ——が、身の危険が迫って恨みを捨てたものか、町を代表する使者や夫のオイネウスやメレアグロスの姉妹とともにメレアグロスに出陣を懇願した事になっている。メレアグロスは、これらの嘆願を拒んだために、あとになって妻クレオパトラの懇請を入れて出陣し、町から災いを斥けたものの、使者が懇願の際に約束していたたくさんのお見事な贈り物をもらえなかった、というのが話の結びである。命を落としてしまうとすれば贈り物云々という話は奇妙であるから、この話形ではメレアグロスは戦いのあとも生きていたと考えるほうが自然である。そうだとすると、しかし、彼の死を嘆く物語展開とはならず、メレアグリデスの出番は失われてしまうことになる。

実際、『イーリアス』ではメレアグロスの「姉妹」への言及はあるが、メレアグリデスは登場しない。

その一方で、しかしながら、メレアグロスの妻クレオパトラとその母マルベーツサについて「悲嘆」のモチーフが見られる。

母はエウエーノスの娘で、くるぶしの美しいマルベーツサという。父はイーダースといって、この世の男の中では最強と当時は言われ、弓を取って神にも立ち向かった。くるぶしの美しい乙女のためにポイボス・アポッローンに相対したのであった。父と母君は彼女「クレオパトラ」を館の中でアルキュオネーというあだ名で呼んでいた。というのも、母親が悲しみ深いアルキュオーン「カワセミ」の運命を嘆いたことがあったからだ。つまり、遠く矢を射るポイボス・アポッローンが彼女をさらったときのことである。

〔イーリアス〕九・五五七―五六四

ここでの叙述は簡略にすぎで不明瞭であり、精確に理解することはなかなか難しいが、「アルキュオーンの運命」というのは、次節のアルキュオネーとケーユクスの物語で詳しく述べるように、最愛の夫と引き離されるか死に別れるかする悲劇を指しているのは確かである。ところが、ここで奇妙なのは、まず、アポッローンがさらったのはマルベーツサであり、したがって、彼女自身が自分の運命を嘆いたとされていることである。加えて、マルベーツサは、結局、イーダースがアポッローンとの争いをうまく切り抜けたことで彼の妻となったのであるから、彼女の場合、「アルキュオーンの運命」はすぐに回避され、それほど運命的ではなかったと思われる。これが二つ目の奇妙な点である。さらに、アルキュオネーというあだ名のついたのが、この運命を嘆いたマルベーツサ本人ではなく、娘のクレオパトラであるのも奇妙である。両親が「アルキュオーンの運命」を克服した記念を娘のあだ名として残したという説明はありうるかもしれないが、愛娘にわざわざ不幸を予感させる名前をつけるというのは不思議であ



る。このように考えると、通常の伝承ではメラアグロスの悲運の死が語られており、その話形に従えば、彼を失ったクレオパトラこそ「アルキュオーンの運命」を嘆くにふさわしいということが気づかれる。そして、そのほうが、クレオパトラのアルキュオネーというあだ名の由来をすつきりと説明するように思われる。ただ、問題は、それではメラアグロスが死んでいなければならないが、その物語展開は「イリアス」の文脈では困るものであったらしいということである。それがどういふことであるかは、話がメラアグロスから離れすぎるので、立ち入らない。ただ、ここでは、こうしたぎくしゃくしたものを持ち込んでもメラアグロスの物語には「悲嘆」をはずすことはできなかった、このモチーフはそれほど重要なものであった、ということが認められそうなることを記しておく。

### 3 アルキュオネーとケーユクス

『ギリシア詞華集』第九卷三二六三歌（メラアグロス作）は、春の到来を主題として、いまや草が芽吹き、花が咲き、牧人は野に出、水夫は船に帆を張り、葡萄栽培や養蜂が始まった、と歌ったのに続いて、

あらゆる種類の鳥が澄んだ声で歌う、カワセミは波間で、ツバメは軒先で、白鳥は川岸で、サヨナキドリは森の木陰で。  
 『ギリシア詞華集』九・三二六三・一六一—一八

と綴っている。カワセミの歌は嘆きに満ちたものとされ、エウリーピデースの悲劇『タウリケーのイーピゲネイア』では、囚われの身でアルテミス神殿に仕える女たちの合唱隊が、

鳥よ、海より突き出た岩礁を辿るカワセミよ、おまえが歌うは悲しい運命。心ある人の心に響く

声で夫のことを嘆き、つねに舞い歌う。私もおまえの向こうを張って悲嘆を歌う。翼のない鳥となり、ギリシアの人々の集いを慕う。

〔「タウリケーのイービゲネイア」一〇八九—一〇九六〕

と歌っている。

さて、この嘆きの歌にまつわる物語は、オウイデイウスによって伝えられている〔「変身物語」一一・四一〇—七四八〕。それによれば、「明けの明星」を父とするトラークイスの王ケーユクスは、兄ダイダリオーンをめぐる出来事（第I部第9章第1節「ダイダリオーン」）や、それに続く変事（ペーレウスは弟ポリーコス殺してしまったことから、祖国アイギーナを追われてケーユクス王のもとに身を寄せたが、そこへ、ポリーコスの母である海の女神プサマテーが凶暴な狼を送つてよこした。ケーユクスが武器を取ろうとするのをペーレウスが押しとどめ、女神に救いを乞う祈りを捧げた。これに口添えしてペーレウスの妻であるやはり海の女神のテテイスも懇願したため、プサマテーも承知し、血を見て喜び殺戮を続けている狼を大理石に変えた）のために不安にかられ、クラロスのアポッロン神殿へ神託伺いに赴くことを計画する。彼がそのことを妻のアルキュオネーに話すと、彼女は蒼白となり、涙で頬を濡らし、嗚咽をようやく抑えながら、夫に嘆願した。

私が怖いのは海です。大洋の陰鬱な光景です。先頃もちぎれた舟板を海岸で見ました。遺骸を納めぬ墓標に名前のみを読んだことも幾度か。まさか、お心に当てにならぬ自信を抱いてはいないでしょうね。たしかにあなたの岳父はヒッポテースの子である風神で、牢獄に強力な風どもを閉じ込め、望みのときに海を鎮めます。でも、いったん解き放たれた風が海を掌中にしたなら、誰にも止められません。

〔「変身物語」一一・四二七—四三四〕

アルキユオネーはこのように言つて夫を諫め、自分も一緒に連れて行つてくれるよう頼む。しかし、ケーユクスは妻を危険の道連れにすることを望まず、結局、父である明けの明星の光にかけて二カ月で戻ると誓言することで、アルキユオネーを納得させた。

涙ながらに見送る妻を残して出発したケーユクスの船は、しかしながら、航路のほぼ半ばを過ぎたあたりで嵐に遭遇する。荒れ狂う波に翻弄されてなすすべもない状況で、ケーユクスはアルキユオネーの名のみを口にし、彼女一人を恋しく思いながら、いま彼女がそばにいないことは幸いだと喜んだ。最後のまなざしをわが家へ向けていたいと思ひながら、方角も分からずじまつたとき、ついに船は大波に呑み込まれる。投げ出されたケーユクスは船の破片につかまりながら、風神や明けの明星に呼びかけたが空しい。

だが、泳ぎながらもつとも多く口にするのは妻アルキユオネーの名だ。彼女のことを思い起こしては何度も名前を呼び、彼女の目の前へと自分の体を高波が運んでくれるように願う。息絶えてのちは愛しい手で埋葬されたいと思ひ、泳げるあいだは、高波の合間に口を開くことのできるたび、遠くにいるアルキユオネーを呼び、波をかぶりながらもその名をつぶやく。見よ、高波のさらに上から黒く弓なりに盛り上がった海水が砕け落ち、砕けた波に包まれて彼の頭が沈んだ。

(同 一・五六二—五六九)

他方、このことを知らないアルキユオネーは夫の帰りを待ちつつ、無事を願つて神々を礼拝し、とりわけユーノー女神の祭壇に参つていた。しかしユーノーは、死者のために祈願が続けられることに耐えられず、一策を講じる。虹の女神イーリスを眠りの神のもとへ使いにやり、ケーユクスの幻をアルキユ

オネーの夢に見させて、本当のことを知らせようとした。

イーリスが眠りの神の館へ赴き、ユーノーの指図を伝えると、眠りの神は千人もの息子たちの中からモルペウスを選び、女神の命令を遂行させることとする。

モルペウスは少しも音を立てぬ翼で飛び、闇を抜け、かける時間も短くテッサリアの都トラキーに着くや、体から翼をはずし、ケーユクスの姿になった。その様子は青ざめて死人のごとく、衣服も着けずに、哀れな妻の枕元に立った。

(同一一・六五〇—六五五)

このケーユクスの幻は、髭や髪の毛の先から滴を落としながら、涙ながらに、変わり果てた姿、亡霊となった自分を示しつつ、アルキュオネーに彼女の祈りが無益であったことを告げる。

私自身が、おまえの目の前で難破した私の運命を告げている。さあ立て。涙を注ぎ、喪服をまとうてくれ。私を哀悼にあずかれぬまま虚ろな冥界に降らせないでくれ。

(同一一・六六八—六七〇)

このように訴えた夫を夢の中でアルキュオネーは抱きしめようとしてかなわず、「待つて」と叫ぶ自分の声で目が覚める。覚めたあとも夫をさがし、どこにもいないと分かると、手で顔を打ち、胸元から衣を引きちぎって胸を叩き、髪を引きむしって悲嘆を表した。

これだったのよ、虫の知らせで恐れていたのは。だからあなたに、私から離れないで、風についでいかないで、と頼んでいたのに。せめてかなうことなら、死ぬ定め船出だったからには、私も

一緒に連れて行ってほしかった。大切なことでした、あなたに同道することは私にとつて。なぜつて、生きているあいだのいかなる時間も一緒に過ごさずにはいかなかったでしょうし、死が別々になることもなかったでしょうから。いま私は遠く離れて死んでしまいました。遠くにいて高波にも翻弄されています。体はそこになくとも私は大海に吞まれているのです。その海にもまして残酷な心が私にあれば、なお生き長らえようと努めるでしょうし、これほどの悲しみにも生き抜こうと戦うでしょう。でも、私は戦いませんし、かわいそうなあなたを捨てません。いまはせめてあなたのごころへ参つて仲間になりましょう。墓に入り、骨壺は別でも同じ碑銘で結ばれましょう。骨と骨でなくても、名前と名前でも触れ合ひましょう。

(同一一・六九四—七〇七)

翌朝、アルキユオネーは海岸に出て、夫の出発を見送つた場所へ行き、思い出しているうちに、ふと沖をやってたとき、人の体らしいものを見つける。それが波に運ばれて近づいたとき、夫の遺骸であることが分かった。彼女は防波堤へ飛び上がった。

そんな力があつたのが不思議だったが、彼女は飛んでいた。たつたいま生えた翼で軽やかな空気を打ちつつ、悲しみ深く波頭をかすめてゆく鳥となつていた。飛んでいるあいだ、喪に服するように嘆きに満ちた鳴き声を細い嘴から発した。もの言わぬ血の気のない遺体のところまで来ると、愛する体を生えたての翼で抱き、甲斐なくも、硬い嘴で冷たい口づけを与えた。これがケーユクスに分かつたのか、それとも、波の動きで顔を上げたように見えただけだったのか、人は決めかねた。だが、ケーユクスには分かつていた。ようやく神々も憐れみを垂れ、二人は共に鳥に変わった。同じ運命に見舞われながらもなお愛は変わらなかつた。夫婦の契りは鳥となつても解けることはな

く、二人はつがいをなして親となり、冬の季節にのどかな日を七つ数えるあいだアルキユオネーは水に浮かぶ巢で卵を抱く。このとき、海は波が静まり、風が吹き出さないように風神アイオロスが監視して閉じ込め、孫たちのために海面を平らかに保つ。

(同一・七三一―七四八)

## 〔注〕

- (1) ローマ古来の神格。
- (2) トラベアは緋紫の上衣で、杖とともにローマの王の出で立ち。
- (3) ローマ第二代の王ヌマのときに天から降ってきたとされ、王権の命運が存すると言われる盾。マルスの神官団であるサリイーが、祭儀のときに携えて踊った。
- (4) デーイアネイラはのちにヘーラクレースの妻となる。アルクメーネーはヘーラクレースの母。